



第14回 「グローバル化時代の『人間』を考える ー歴史人類学からの視点」

田辺明生 総合文化研究科 超域文化科学専攻 教授

司会 伊達 聖伸(総合文化研究科 地域文化研究専攻)

討論者 吉国浩哉(総合文化研究科 言語情報科学専攻)

國分功一郎(総合文化研究科 超域文化科学専攻)

馬路智仁(総合文化研究科 国際社会科学専攻)

使用言語 日本語

日時・会場

2021年6月15日(火) 14:55 - 16:40

Zoom Webinar (<https://bit.ly/3hFZUN1>からご登録ください。)

要旨 本報告では自分自身の研究を振り返りながら、グローバル化時代の「人間」のありかたを考えたい。インドの歴史人類学から見えてきたのは、多様性の出会うコンタクトゾーンとしての南アジアの姿であり、さまざまな人間が他の人間たちそして自然環境とつながりながら地域固有の集合的な生のかたちをつくっていくありさまであった。南アジア型発展径路を考えることは、より多くを生産するために人間はいかなる社会をつくってきたのかという従来の問いに代えて、人間はいかに多様な他者の存在を歓びと豊かさの源とできるのかという、おそらくはより重要な問いを世界史研究にもたらししてくれるものであるように思われる。グローバル化は、世界の各地域を緊密に結びつけるだけでなく、人間と人間ならざるものの相互作用をより密接にしており、そこから地球温暖化やコロナ・パンデミックなどの問題も生まれている。そのなかで決定的に重要なのは、人間が社会や世界をいかに統御するかではなく、さまざまな人間と人間ならざるものがともにありうる関係をどのようにつくっていくかという問いであろう。そのなかで、人間は、自律的な判断力を持って物事を決定するhuman beingではなく、周囲とのつながりのなかで環境とともに生成変化していくhuman co-becomingである、と考える視角が重要になってくるのではなかろうか。こうした人間観の転換は、人間が生きる世界・地球・惑星・この世たる「グローブ」観の転換、ひいてはグローバル・スタディーズの再定義をもたらすものではないかと考えている。